

作者: 不詳

成立: 貞応2年(1223)



## 解題

## Keyword

- 鎌倉
- 東海道
- 「鎌倉紀行」
- 細川幽斎
- 「鴨長明海道記」

鎌倉幕府成立(1192)のほぼ30年後、承久の乱(1221)の記憶も生々しい時期に、京都から鎌倉へ旅をした老出家の見聞と感想を記す。「海道」とは東海道を指し、まとまった東海道紀行として現存する最古の作といわれる。

## ■ 成立経緯

旅行の年月が貞応2年(1223)4月から5月と本文にあり、原本の成立もそれから間もない時期とみられる。作者については早くから鴨長明とする説が一般に浸透し、そのほか源光行(群書類従本)らの名も挙げられていたが、いずれも近代以降の研究で否定され、現在は作者不詳とされている。

## ■ 内容

漢字仮名交じりの和漢混淆文で書かれ、随所に和歌が挿入されている。原文に章立てはなく、冒頭に作者の自己紹介的な部分が置かれ、続いて日付のある紀行文となる。4月4日に京都を出発、鈴鹿の関から伊勢、尾張、三河と東海道を下り、同月16日、駿河から足柄峠を越えて現在の神奈川県に入った。関下(南足柄市関本)、逆川(小田原市海勾)、大磯、砥上が原(藤沢市)、江の嶋を経て、鎌倉に到着したのは17日夜である。10日ほどの鎌倉滞在の記述では、新興都市の繁栄や幕府の治世をたたえ、勝長寿院・永福寺・鶴岡八幡宮等に参拝した感動が綴られる。5月、京に残した老母も気にかかり、由比ガ浜を立って帰路につくところで紀行は終わる。巻末には作者の仏教思想が述べられている。

## ■ 諸 本

加賀藩前田家旧蔵の享徳3年(1454)の写本(外題『鎌倉紀行』、尊経閣文庫蔵)が最古の善本とされ、岩波文庫以来、多くの刊本の底本になっている。ほかに、細川幽齋が慶長3年(1598)に書写させた『鴨長明海道記』(永青文庫蔵)の系統、群書類従本の底本となった寛文4年(1664)版本などがある。



### 史料本文を読む

#### <影印本>

- ◆内閣文庫本「鎌倉紀行」(『海道記の研究』江口正弘著 笠間書院 1979 [915.45/5]) ※尊経閣文庫本を明治13年(1880)に書写したもの
- ◆\*永青文庫本「鴨長明海道記」(『細川家永青文庫叢刊』第12巻 永青文庫編 汲古書院 1984)

#### <翻刻本>

- ◆「海道記」(『東関紀行・海道記』玉井幸助校訂 岩波書店 1935 (岩波文庫) [K99/40])
- ◆「海道記」(『群書類従』第18輯 紀行部 卷330 [K08/17/1-18])
- ◆尊経閣文庫本「鎌倉紀行」／細川家永青文庫蔵「鴨長明海道記」(『海道記の研究』江口正弘著 笠間書院 1979 [915.45/5])

#### <注釈本>

- ◆「海道記」玉井幸助校註(『海道記・東関紀行・十六夜日記』朝日新聞社 1951 (日本古典全書) [K99/26])
- 『海道記全釈』武田孝著 笠間書院 1990 (笠間注釈叢刊14) [K99/52] (索引あり)
- ◆「海道記」大曾根章介・久保田淳校注(『新日本古典文学全集51』岩波書店 1990 [918/20/51]) (索引あり)
- ◆「海道記」長崎健校注・訳(『新編日本古典文学全集48』小学館 1994 [K99/63]) (索引あり)



### 史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆石田瑞麿「海道記の宗教」(『金沢文庫研究』vol.20(4) 神奈川県立金沢文庫 1974 [K05.17/1])
- 『海道記総索引』鈴木一彦ほか編 明治書院 1976 [915.45/3]
- 『海道記の研究』江口正弘著 笠間書院 1979 (笠間叢書 140 [915.45/5])
- 『海道記：語彙及び漢字索引』江口正弘編 笠間書院 1979 (笠間索引叢刊 71) [915.45/4]